図書紹介・New Publications

魚類学雑誌
51(2): 183

□生態学・行動学

サケ・マスの生態と進化. —前川光司編. 2004. 文一総合出版, 東京. 335 pp. ISBN4-8299-2184-6. 3,400円(税別). 近年めざましい発展を遂げた行動生態学, 分子生物学, 進化学の文脈にそって, 過去から現在そして未来へと至るサケ・マス類の描写が試みられる. 若手を中心とした執筆者は, 系統, 生活史, 環境収容力, 種間競争, 河川生態系, 人工孵化, 保全をキーワードに, 独自の視点から論を展開する. 各章・節はトピックを含んだ小品として仕上がっており, 読んで面白い. 多岐にわたるテーマを進化生態における潮流に収束させていくあたり, 編者の手並みのよさを感じさせる. 内容は専門書のレベルにあり, この分野に興味を抱く若者に読み解きを勧めたい一冊である. (井口恵一朗)

魚類の社会行動 3. —幸田正典・中嶋康裕共編. 2004. 海游舎, 東京. 234 pp. ISBN905930-79-0. 2,600円(税別). 本書は,「魚類の社会行動」全3巻の最終巻に当たる. 6章からなる本書では, 若手の研究者がいろいろなエピソードを交えながらその研究内容を各章で紹介している. 登場する魚には海産魚も淡水魚も含まれていて, 調査地も南は沖縄から北はバイカル湖までと多様である. 普段ではなかなか聞くことのできない研究の裏話や失敗談も語られていて, 研究は実際にはどのようにするのか, を知ることのできるまれな書物と言える. 最近の魚類の繁殖生態の教科書としてはもとより, これから魚の野外調査をやってみたいという人にぜひ読んで頂きたい. (幸田正典)

性転換する魚たち. —桑村哲生. 2004. 岩波新書, 東京. 205 pp. ISBN4-00-430909-3. 780円(税別). 和歌山県白浜でのホンソメワケベラから沖縄瀬底島でのムラサメモンガラ, ダルマハゼ, カザリキュウセンの研究へと続く著者の研究史が予期せぬ失敗と発見を交えて興味深く語られている. 主題である性転換は, 雌雄の体サイズと社会構造, そして個体にとっての利得と損失によってきまるという強い信念のもとに, 様々な魚種についての事例がわかりやすく展開されている. 魚種によって, 産卵習性, 性比, 死亡率, 生息環境, 捕食者との関係, 系統的制約などの諸条件が異なるが, そのうちどの要因が繁殖成功や性転換に重要かは, それぞれの種についての実験や粘り強い野外観察なしには明らかにならない. 自発的な共同研究を組織し, サンゴ礁の魚類の謎を解明し続ける著者に敬意を表したい. 本書の最後に, 最近になって性転換について新しい発見と「思いがけない謎」が生じたとある. 読者には何のことかわからず気になってしまう. できるだけはやく, その説明をお願いしたい. (片野 修)

□生理学

魚類の受精. —岩松鷹司. 2004. 培風館, 東京. 189 pp. ISBN4-563-07778-X. 3,500円(税別). 本書はタイトルの通り魚類の受精を扱った本である. これまでに動物の発生や受精を扱った本はいくつか出版されているが, 魚類に限ったものはおそらくこの本が最初であろう. 内容は, 受精に至るまでの配偶子形成から配偶子の形態に始まり, 受精過程での形態的, 生化学的, 分子生物学的なイベントから, 後半には多精拒否, 異種間受精や雌性発生に至るまでが網羅的に記されている. 著者自らの研究成果の他, これまでに多くの研究者によって積み上げられてきた成果が余すことなく紹介されている. しかし, 著者もあとがきで述べているように,「たかが1時間ほどのできごとである受精現象が, いまなお厳密に明らかになっていない」ことも事実であり, 今後に残された課題が見えてくる. 魚類の受精や生殖生理学, あるいは生殖生態学の研究者にとっては待望の書であろう. 専門的で一般読者には難解な部分もあろうが, ほとんどの見開きに図表が掲載されており(図94個, 表11個), 理解を手助けしてくれる. 特に著者自らが描いた数々のスケッチは繊細かつ正確であり, 一見の価値がある. 表紙に描かれている満月を背景に人魚がラッパを吹くイラストは, 雌から雄への呼びかけと, 卵と精子の出会いを暗に表現した, 著者オリジナルの作品である. (古屋康則)

□進化形態学

動物進化形態学. —倉谷 滋. 2004. 東京大学出版会, 東京. 611 pp. ISBN4-13-060183-0. 7,200円(税別). 本書は, 生命の本質ともいえる発生と進化を統一的に理解しようとした書である. 話題はフォン・ベアやヘッケルの比較形態学・比較発生学の古典的分野から, 最新の分子遺伝学的手法で飛躍的に理解が進みつつある発生生物学の分野に及ぶ. ナメクジウオ, 魚類からほ乳類に至る脊椎動物に見られる分節性と神経系の発達と形態形成の関係などを例証する. そして, 発生生物学と, 生態学を基盤とした進化生物学との統合に向けての展望を説いている. これからの進化発生学を切り開こうとする意欲を感じた. (高田啓介)